

## 私の知る麻生平八郎先生

武 田 孟

私が麻生先生と懇意になったのは、先生が始めて専門部商科のドイツ語を担当された昭和6年であって、それ以来40数年の間、商学部教授会の同僚としてまた友人として公私に亘って親しくしてきました。先生は今でもそうですが、中学時代から秀才の誉れ高く、且つ無類の勉強家であります。昭和4年の本学法学部独法科（旧制）の出身で引続き大学院に進まれました。その間、予科3年、学部3年、大学院4年と計10年の在学中、特に外国語の修得に心がけ、英、独はもちろんのこと仏、露の4ヶ国語をマスターして、それらの原書を自由に読破してゆきました。それゆえ、学生時代からそのすぐれた語学力を生かして翻訳に興味をいただき、幾つかの名訳をものにしています。もし、当時の社会情勢が今日のようにこの道で生活できる保証があったなら、先生の前途は今とちがった道を進んでいたかも知れません。

先生は大学院にあって専攻の産業行政、交通行政及び一般経済との関連を究明するかたわら、最も力を注いだのは哲学と経済学の研究でありました。哲学は新カント学派のリッケルトやウィンドルバンドを中心に、また、経済学においては禁止されていたマルクス経済学を極秘のうちに勉強していました。そんな関係で、先生は若手の進歩的学者の集りである読書会のメンバーでありました。戦後東大学長となられた大河内先生や獄中で非業の最期をとげられた尾崎秀実氏らと親しかったのもそのためです。

こんなことがありました。日支事変から上海事変へと拡大してゆき東亜の風雲がいよいよ急を告げて、日本は戦争の泥沼に陥りましたが、軍部や政府は国民に全く真相をかくしていました。そこで商学部の有志の者は少しでも正しい時局認識を深めようと、その道に精通した人を招いて時局談を聞くことにしていました。ある時、麻生先生の紹介で、当時支那問題研究では第一人者として

自他共にゆるしていた前記の尾崎秀実氏から、世間に知れていないもろもろの裏話を聞いたものです。ところがそのことがあって間もなく、尾崎氏はゾルゲ事件に連坐して捕われの身となり刑死されました。そういう暗黒時代でした。ちなみに、この尾崎秀実氏の実兄尾崎秀波君は明大で私たちの同級生で親しい間柄でありました。

麻生先生は前に述べたように法学部の卒業でしたが、たまたま昭和5年春にドイツ留学から帰朝された商学部の佐々木吉郎先生との間で、哲学・経済学について議論する日が続きました。どちらも新進気鋭の論客であって、年齢の差こそあれ、学問の上では同格で互に相譲らず、随分烈しい論争が行われたと聞いています。それが縁となって、佐々木先生が商科科長であった大田黒敏男先生に推薦したので、それ以来麻生先生が大田黒先生の担当されていた交通論の講義の後継者となったわけであります。

麻生先生の学究的態度は決して尋常一様のものではありません。それだからこそ、あれだけの労作を次々と発表することができたのでしょう。戦前、今の二号館に粗末な研究室が設けられていました。先生の自宅は千葉であり、今日とちがって交通が不便でありましたが、それにしても研究室に寝具を持ち込み、昼夜の別なくいつもここで勉強していられた姿が今も眼に浮かんできます。先生のようにここを根城として研究に没頭した人は未曾有のことでした。ことに先生は人一倍寒さに弱いので、暖房設備も無かったその頃の研究室での冬の生活は苦しかったにちがいません。それを敢えて堪えられた先生の学問への情熱には全く頭の下がる思いが致します。

先生はこのように学問に対して自らを律するには、まことに厳しいものがありました。その反面、親身となって人の面倒をみる暖かい心の持主でもあります。それについてこんなこともありました。先生と同じ頃、商学部の出身に金洵植君がいました。非常な秀才で将来を嘱目された人で、商学部教授会は彼を講師として採用し、簿記・会計学の講義を担当させました。ところが金君の助教授のとき魔がさしたというのか一身上の問題で日夜苦悩していました。それを同僚として陰に陽に直接庇護してことなきを得させたのは麻生先生の陰の

努力の賜でした。そのおかげで金君は韓国の独立後、高麗大学の大学院長から国立釜山大学総長の栄職に就き韓国会計学会の大御所となりましたが、惜しいことに先年物故されました。

戦後学生運動が盛んとなり、学費値上げ反対、教育施設の充実等を訴えた学生騒動の危機に幾たびか直面した折り、その都度解決のために人知れず苦勞されたこと、就中、昭和30年の専教連を中心に学内改革が断行されたときの苦心など並大抵のものではありませんでした。そのほかにも先生の功績は、学内にあっては、商学部長、大学院長、社会科学研究所長等の要職にいて教育・研究の充実に尽されたことや、長く評議員として法人の大学経営に苦言を呈されたこと、また、学外にあっては、日本学術会議会員、日本交通学会会長、日本海運経済学会会長、運輸省の鉄道建設審議会委員等学の内外においての活躍は枚挙にいとまありませんが、何れも周知の事柄ですから省略致します。